

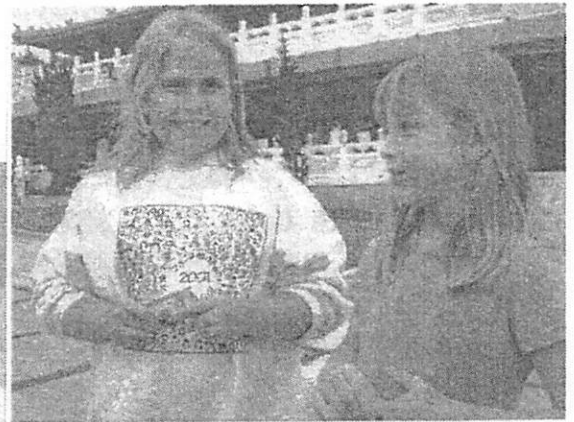
ひのき林

たいこ楽団 ひのき屋
情報通信

第17号



●カリフォルニア ツアー報告特集●



5月21日～6月7日、ひのき屋はアメリカ西海岸のカリフォルニアへ、初の海外ツアーに行って参りました。

今号のひのき林では、新鮮な刺激いっぱいだったカリフォルニアツアーの様子を特集してお伝えいたします。

カリフォルニア滞在記 18日間の

スタンフォード・ベーカーズフィールド・ロサンゼルス

全10ヶ所でのライブ!

そがなおと

5月21日 楽器箱の運搬にひと苦労

今回のツアーで大変だったのは、普段使っている楽器類をほとんど全て現地に運んだということだ。重さ50~140kg、約1m四方の木箱を計9個、飛行機を乗り換える度に人力で空港内を移動させた。運の悪いことに、あまりの重さに耐えかねて、木箱のキャスターが半分以上破損してしまい、結局、成田とサンフランシスコの空港では専属のポーターに応援を頼むことになった。

この日は時差の関係で40時間という長い1日を過ごす。その疲れからか、同行してくれた通訳の大塚千枝さんが、現地で車を運転中に反対車線を逆走してしまい、ポリスマンに注意されるというハプニングも起こった。

5月22日 STOMPライブでおおはしゃぎ

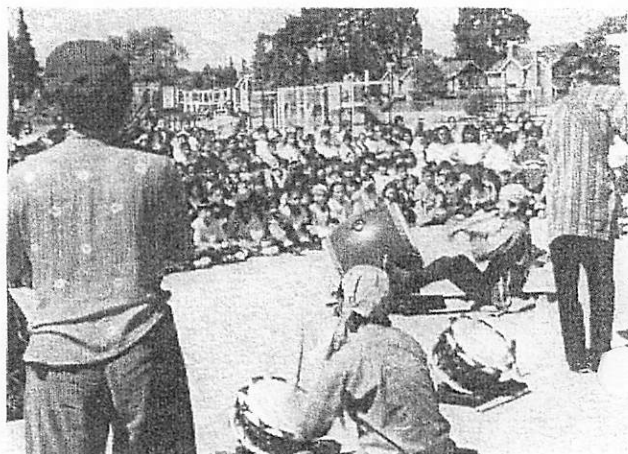
スタンフォード大学近くのホテルを朝出発。日中は大学の音楽棟のホールを借りて練習する。夕方からはサンフランシスコの街中で行われるSTOMPのライブを観に行く。彼らは日用雑貨品を楽器に仕立てて音楽をつくるパーカッションのグループで、世界中でヒットしているという。500席程の会場は連日公演しているのにも関わらずほぼ満員であった。彼らは掃除用モップ・ライター・新聞紙・ボール・ペットボトルなどを用いて、軽快にショーを展開していく。客席の盛り上がりは相当なもので、最後まで笑いにあふれ、1曲終わる度に歓声があがる。我々も一緒に楽しんだ。

5月23日 小学校での初ライブは大成功

午前中にスタンフォードの隣の地区の小学校で2ステージ行う。低所得者層の人々が住

む地域内にある学校で、ヒスパニック系や黒人の子ども達が圧倒的に多い。よく晴れた日で気温が30℃以上に上昇する中、野外で演奏する。子ども達の反応はとても良い。なんだか楽しくてたまらないという顔で観てくれる。日本と同じように、獅子舞の獅子やひょっとこのしぐさに敏感に反応し、その度に歓声がわき起こる。たいこ体験コーナーでは友達のとたく姿をみんなが温かく見守っていた。

午後からは、別の小学校に移動して公演を行った。ここも先程以上に貧しい地区内にあった。四方を校舎で囲まれた陽当たりの良い中庭が会場である。ここでも子ども達は最初から大盛り上がりである。おそらく、日本の太鼓はおろか、この様に生の音楽を聞く機会も少ないのだろう、おどろくほど素朴な反応が返ってくる。「ドッコイダンダカ」では、数人の子ども達が立ち上がり、踊り出すと、あっという間に数百人の子ども達が立ち上がり、そこいら中で飛び跳ねた。その光景に演奏している僕らも興奮した。



5月24日 現地のプログループと交流

この日は、サンフランシスコの医科大学でアジアフェスティバルというイベントが開かれており、その中で演奏した。僕達の他にもアジアの音楽を演奏するグループがいくつも出演している。30分という時間だったが、演奏の後半あたりから続々とお客さんが集まり、最後には立ち見のお客さんで会場中が埋まった。主催者の方が「今回のイベントの中で一番の盛り上がりでした」と言ってくれた。

夕方より、サンノゼにある日本町を訪ね

た。そこで第2次世界大戦中に日系人が強制的に移住させられた収容所の博物館を見学する。その後、プロの太鼓グループであるサンノゼ太鼓の事務所とスタジオを訪問し、メンバーと交流した。驚いたのは、そこが太鼓の一大情報交流センターになっているということだ。サンノゼ太鼓は30年程前から活動しており、鼓童、鬼太鼓座、わらび座といった日本のグループとも交流を深めている。大きなスタジオ内には、太鼓の製作工房と楽器倉庫と稽古場があり20名ほどのメンバーが活動している。エネルギーで躍動感があり、かつおおらかさをそなえた彼らの太鼓はひのき屋の太鼓とも波長が合い、とても楽しい交流ができた。

5月25日 女性の打楽器バンドに出会う

スタンフォードから約100km離れたコンコルドの街まで、リズムックスという打楽器グループの演奏を聞きに行く。この日も天候が良く、ベイブリッジを渡って約3時間のドライブを楽しんだ。会場に着くとハワイアンของกลุ่มがちょうど演奏していた。何だか会場の雰囲気がとても良い。ほとんどが家族連れのお客で、のんびりと時を過ごしている。となりの部屋ではおそらく老人クラブか何かだと思われる方達が手づくりのサンドイッチやホットドッグを販売していた。

リズムックスは女性5人のグループで、和太鼓・アフリカのジャンベなど、様々なパーカッション楽器を繰り出してオリジナル曲を聞かせてくれる。メンバーは30代~50代位で日本ではあまり見ることのない年令構成だった。太鼓をたたきながらのコーラスがとても力強かった。



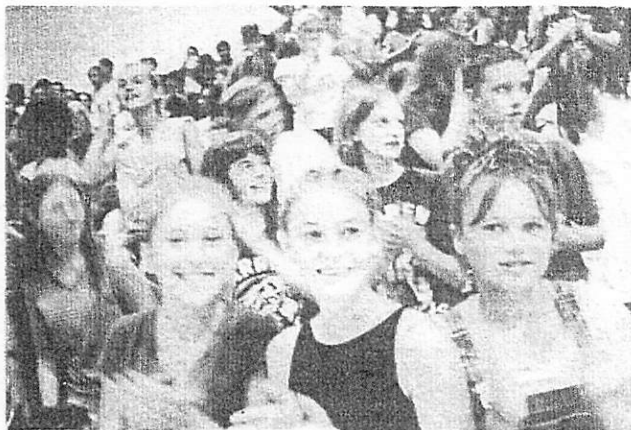
5月26日 現地の大学生は踊りが大好き「インビテーションショナル」。カリフォルニアの各地の大学から、和太鼓を愛好する学生達が一堂に会して互いに学びあう、年に一度の祭典である。ひのき屋はゲストとして招かれている。初日は各会場でゲストによるワークショップが開かれた。僕達は、トヨスという竹のようによくしなるバチを桶太鼓に打ちつける津軽のたいこ文化を味わってもらおうと、ねぶた囃子を素材に選んだ。ねぶた祭りはシンプルなたいこのリズムのもと短時間で多くの人を踊りの輪にひきこむという良さがある。実際にワークショップに参加した学生達も、津軽ではハネトと呼ばれる踊りに大満足してくれた。せまい会場中をみんなで「ラッセラー」とかけ声をかけながら飛び跳ねた。彼らは「踊る」という行為にあまり恥じらいや抵抗感がなく、むしろ太鼓をたたいているときより生き生きとしている。僕らの方がむしろ彼らに圧倒されっぱなしであった。



5月27日 太鼓コンサートにゲストで出演 インビテーションショナル2日目。この日は参加者全員でコンサートをつくる。スタンフォード大学内にある劇場では朝からリハーサルが行われた。ひのき屋もコンサートの最後のトリをつとめる。アメリカでは多くの場合、ワイン樽を胴に用いて、それに牛皮を張って自分達で太鼓を製作する。そのことだけで尊敬してしまう。コンサートではひのき屋の他にも、アメリカ国内の2つのプログループの演奏を観ることができた。1つはポートランドから来た3人組のグループで、和太鼓にバイオリンと舞踊をからませたクラシック系の優

雅な音楽で聞いていて心地よかった。もう1つはハワイから来たソロの太鼓奏者で、大太鼓1つで様々な音色を楽しませてくれた。

ひのき屋の演奏はここでも大変盛り上がった。たくまのMCに会場は爆笑の渦だった。ラストの曲「バッファロー」が終わるやいなや、お客さんが次々と立ち上がり、いつまでも拍手と歓声を僕達に投げかけてくれた。終演後、ロビーで何人ものお客さんから声をかけられた。「こんなに楽しめる太鼓があったんですね、今まで知らなかった」「あなた達ならアメリカでも成功するわよ」「今、日本ではあなた達の様なスタイルの太鼓が流行しているの？」などと和太鼓がさかんなカリフォルニアならではの質問を浴びせてくる。この日はCDもたくさん売れ、メンバーはサインに追われながら、次につながる演奏ができた実感していた。



5月28日 野球場で大リーグ観戦

朝からスタンフォード太鼓のメンバーであるジーナに大学キャンパスを案内してもらった。広大なキャンパス内はとにかく緑が豊かで、赤い屋根の建物群もどっしりした質感があり、散歩しているだけで気持ち良い。こんなキャンパスで学生生活を送れるのがとてもうらやましい。

午後からは、ベースボール観戦。サンフランシスコジャイアンツとダイヤモンドバックスの1戦。この日は祝日ということもあって、3階席まであるスタジアムは超満員。応援では日本のように太鼓やトランペットといった楽器は一切使わない。手拍子と歓声、そして味方がチャンスのときは立ち上がって声援を送る。多くの人がグローブを持参しており、ファールボールが飛んでくる度に、大

人も子どもも入り乱れてボールを奪い合う。スタジアム側の演出もきめ細かい。手拍子を誘発する音楽を、ここぞという場面ではパターンを変えて流し、手拍子が始まったらさらりと音楽を止めて手拍子の自立をうながす。スタジアムが海岸に立地しているため、大きなホームランは海中に飛んで行くのだが、その模様を場外に設置されたカメラで追い、スタジアム内のスクリーンで流す。生ビールを味わいながら、味方のファインプレイには周囲の人と一緒に喜び、ぶざまなプレイにはブーイングを飛ばす。ゆったりと午後のひとときを過ごすことができ、心身ともにリフレッシュできた。

5月29日 この日は幼稚園で演奏

スタンフォード近郊の幼稚園で演奏する。子どもたちは獅子舞がとっても怖かったようで、何人かは泣き出して、先生の腕の中に必死に逃げ込んだ。ちょっと怖がらせすぎたかなと、反省していると、演奏終了後には皆ケロッとして楽器に近づき、思い思いに太鼓を鳴らして遊んでいた。



5月30日 青空の下でたいこライブ

スタンフォード近辺での最後の公演。この日はとっても暑く、400人程の小学生達の前で汗だくになってたいこを打ち続ける。カリフォルニアの小学校では、どれだけ気温が高くても、入学式などの学校行事を屋外で行うことが多いと聞いた。毎日当たり前のごとく快晴の日が続き、この頃にはひのき屋の面々も、肌が焼けて真っ黒である。洗濯物も一瞬にして乾いていく。

演奏後、引越し用の小型トラックに荷物を

移し替え、お世話になったスタンフォード太鼓の面々に別れを告げてから、次なる目的地ベーカーズフィールドに向かった。7時間のドライブを経て、深夜の1時に、函館のたいこ仲間であるクリスの実家に到着した。

5月31日 プールでおおはしゃぎ

正午過ぎに、ベーカーズフィールドのオフィス街で大道芸を試みるが、意外にも人通りが少なくなかなか人が集まらない。それでも立ち止まって見てくれた10数人のお客さんの前で40分程演奏した。

クリスの実家はとても広く、庭にはプールがある。このプールは、水深が2.5mあり、飛び込み台も設置された本格的なものである。この日、日中の気温は40℃近くまで上がり、帰宅後、みんなで一斉にプールに飛び込んで汗を流した。

6月1日 700人の中学生達が総立ち

クリスのお母さんが教員をしている地元の中学校で40分程演奏した。屋内のバスケットボール競技場に設けられた階段上の客席に、700人の中学生が座っている光景はなかなか壮観である。どんな反応が返ってくるかとドキドキしながらのぞんだが、1曲目から生徒達はノリノリであった。ここでも曲が終わる度に大歓声がわきおこる。最後にはアンコールも飛び出し、生徒達から手拍子とかけ声の応援をうけながら「ねぶた囃子」を演奏した。終演後、学校の先生達が「この学校で生徒達が自発的にスタンディングオベーションをしたのは、今日が初めてです」と興奮気味に語ってくれた。

夕方、荷物を詰め込んで、最後の滞在地であるロサンゼルスに向かった。



6月2日 全米最大級の寺院でライブ

この日の演奏会場である仏教系の寺院は、とても巨大な建物であった。僕はこれより大きなものは、日本でも奈良の東大寺以外見たことがない。敷地内に足を踏み入れると、そこはもう台湾文化圏で、中国語の文字が目立つ。全米中から集まってくる観光客や信者さん達も、ほとんどが台湾からの移民が多く、耳には中国語しか聞こえてこない。朝・昼・晩と寺院内にある食堂でおいしい台湾料理をごちそうになった。

午後に、回廊に囲まれた中央の大広場で約30分演奏した。何よりもロケーションがすばらしく、とても気持ち良くたいこが打てた。石段に腰かけて僕達の演奏を観ていたお客さん達が、終了後次々と楽器の周りに集まってきた。彼らと一緒に記念写真を撮ったり、買ってくれたCDにサインをしたりと楽しいひとときを過ごす。中には「総本山のある台湾にも来て下さい」と熱心に声をかけてくれる人もいた。

6月3日 海岸の観光地でショッピング

サンタモニカのビーチで終日ショッピングを楽しむ。ショッピングモール街では、たくさんの大道芸人達が買い物客を前に芸を披露していた。

6月4日 ハリウッドのスタジオで興奮

ハリウッド内のユニバーサルスタジオで終日遊ぶ。ジュラシックパーク館の乗り物で、水にズブ濡れになったり、スタジオ内で繰り広げられる数々のショーに興奮しながら時を過ごす。大がかりな仕掛けと、お客さんを楽しませる巧妙な演出に最後まで感心させられた。

6月5日

ロサンゼルス空港から成田に向けて出発。

6月6日

成田空港内にあるホテルで1泊。

6月7日

午後、函館空港に着く。久々の函館は肌寒かった。

今号のひのき林は、

カリフォルニアツアー報告特集号ということで、曾我直人による「カリフォルニア滞在記」からお届けしております。大増ページで読みごたえた、ぷりのひのき林、夏に向けてのイベント紹介もあります。どうぞお見のがしなく。続いては、初の海外ツアーを終えて、「一番印象に残ったこと」について、メンバー各々とツアーに同行したカメラマン、セバスチャンのコメントです。



曾我 直人 ————— Naoto

カリフォルニアで和太鼓をたたいていると、自ずと日系米国人に出会う機会がたくさんもてることを今回初めて知った。実際に各地で、和太鼓をたたく日系米国人に相当数出会った。「和太鼓をたたく」ことに対して、彼らは何らかの意味やメッセージを持ち合わせて演奏していることは、ほとんど英語のはなせない僕にも容易に感じとることができる。なんだか彼らと、もっともっと交流したくなった。



嶋田 めぐみ ————— Megumi

大人も子どもも、素直で無邪気でとってもかわいらしい。よく食べ、よくしゃべり、よく笑う。
スタンフォードにいた十日、雨は一日も降らなかった。「この気候なら、人間変わりそうだもんなあ」と言った渡部くんの言葉が印象的。
暑い暑いとオレンジジュースばかり飲んでいたせいか、帰ってきたら虫歯が一本できていた。(痛いぞ!!)



ふくだ たくま ————— Takuma

ジーナはちょっと憎めない女の子。私のおみやげを買いに2人は足を揃えてブックストアへ。2冊の本で迷ううちに、2人は顔を見合わせて、”cheaper! (安い方)”なんて声をあわせる。レジでは小銭を出し合って、その要領の悪さに大笑い。ソフトドリンクもゲットしていざ旅立ちの準備だ! と思ったら、太鼓や重たい大道具の積み込みがほとんど終わっていた。メンバーに怒られた。



渡部 洋士 ————— Hiroshi

それはベーカースフィールドの学校でのこと。日本でいう中学生が700人、体育館に集合した。ただでさえ換気の良くない体育館で700人が大興奮しているのである。呼吸ができないのだ。あれ程までに苦しい思いをしたのは僕がスプリンター時代、400メートルを走って以来のことかも知れない。



雨宮 牧子 ————— Ame

演奏初日は小学校3本立てだった。3本目の小学校の子ども達とはとにかく元気で、秩父にあわせて机をたたきまくり、ドッコイダンダカでは踊りだした子ども達が太鼓と客席の間のスペースを埋め尽した。演奏の後、ひとりの小さな男の子が「Thank you」と言いながらわたしのお腹にゆっくりと抱き着いた。子ども達は次々とやってきてはわたしを抱きしめてくれた。可愛くて可愛くて可愛くて、嬉しかった。



田中 良 ————— セバスチャン

ブルースカイ、ハンバーガー、健康的な姉ちゃんなどいろいろあるけど・・・一番印象に強いことというとなつぱり、スタンディングオベーションですね。その瞬間、ぼくは、ひのき屋はアメリカに完璧に受け入れられたと思ったね。本当に興奮した。あの雰囲気味わうことができてとても幸せだった。

それが写真で伝わればな～。



曾我の後ろにいるのは、通訳兼マネージャーとして今回のツアーに同行してくれた大塚千枝さん。大変お世話になりました。